

症 例

ロピナビル・リトナビルで治療した新型コロナウイルス肺炎(COVID-19)の症例報告

¹⁾国際医療福祉大学熱海病院 糖尿病代謝内科

²⁾国際医療福祉大学熱海病院 脳外科 ³⁾国際医療福祉大学熱海病院 外科

宮下 馨¹⁾ 篠永 正道²⁾ 池田 佳史³⁾

序 文

クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の乗客の症例を報告する。本症例は当初軽微な感冒症状のみで経過し、当院搬送時には無症状であったが、のちに高熱と肺炎を生じ、抗 HIV 薬であるロピナビル・リトナビル合剤（カレトラ）で治療を行った。カレトラ投与後は自覚症状の改善があり、当院入院後 20 日間で PCR の陰性化を確認し退院に至った。以下に詳細を述べる。

症 例

30 歳時に胸膜炎の既往がある 71 歳女性。2020/2/4 に患者の夫に微熱があり、患者本人にも咽頭痛があったことから両者に PCR が施行された。夫は陰性であったが、本人が陽性となったために新型コロナウイルス感染症の診断となり、隔離のため 2/7 に当院に転送、入院となった。搬送時には身体症状は消失しており、入院時の単純 X 線、胸部単純 CT でも肺炎像は認められず (Fig.1)、隔離のうえ経過観察のみとして対応した。翌 2/8 の 19 時の検温で 37.4℃の発熱があり、2/9 の 16 時には 39.1℃に達した。身体症状は倦怠感のみで咳嗽や酸素化低下は見られなかったが、CTで左上葉や右中葉背側部にすりガラス影主体の陰影が出現していた (Fig.2)。2/10 に発熱は 38℃台で経過し、咳嗽や咽頭痛が顕在化した。2/11 には咳嗽と咽頭痛は改善傾向にあったが、CTを再検したところそれぞれの肺野異常陰影が拡大、悪化していた (Fig.3)。臨床症状の改善はあるものの画像所見の悪化が続くことから、国立国際医療センター感染症科の助言を受け、カレトラの投与を開始する方針となった。2/12 よりカレトラ配合錠 1 回 2 錠(400/100mg)を 1 日 2 回、10 日間の計画で投与開始となった。2/13 夜にはカレトラの副作用と思われる水様下痢が現れ

たが、強い倦怠感が消失し、2/14 には解熱が得られた。2/14 から下痢に対し整腸剤を処方している。ただし 2/16 の CT では引き続き病変が増悪し、新出病変も認められていた (Fig.4)。臨床所見は改善したまま経過し、2/21 になって CT で病変の改善が得られた (Fig.5)。2/22 と 2/25 に喀痰検体による PCR を実施し、2 回とも陰性であった。臨床症状の改善と PCR の陰性化を確認し、2/26 に退院となった。

Fig.1 2020/2/7

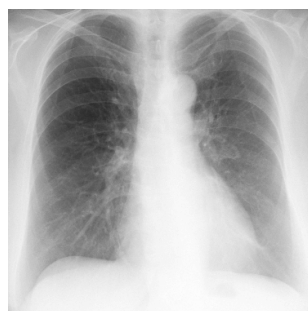


Fig.2 2020/2/9

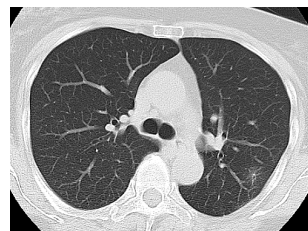
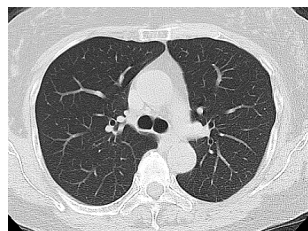
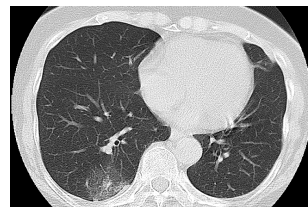
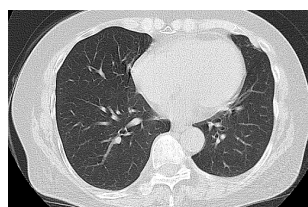
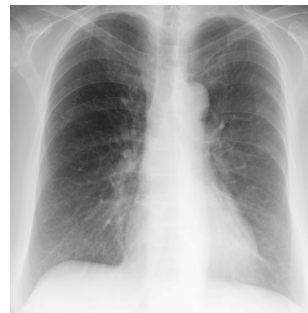


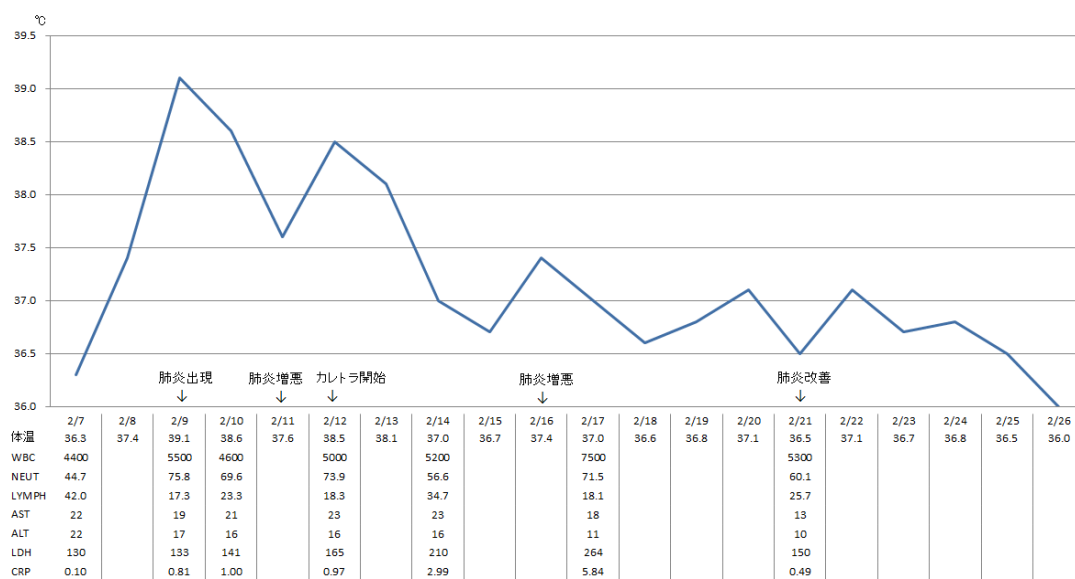
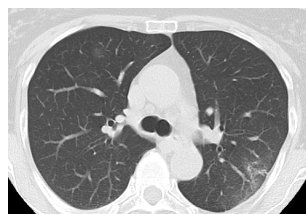
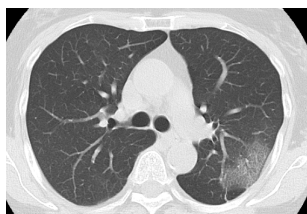
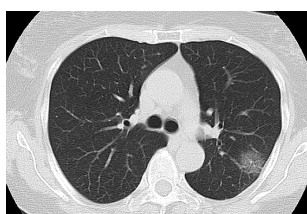
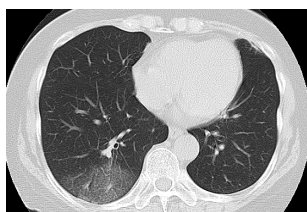
Fig.3 2020/2/11



Fig.4 2020/2/16



Fig.5 2020/2/21



考 察

本症例は軽微な感冒症状で始まり、4-5日の経過で発熱と肺炎の出現が見られている。基礎疾患は知られていないものの高齢であり、重症化のリスクがあると判断し臨時の倫理委員会の審査のもと早期の介入を決定した。有害事象は下痢のみで経過し、画像所見の増悪に反し臨床経過は改善に転じており、本例の経過に限って言えばカレトラの投与は好意的に評価して良いと考える。酸素化低下などの重症化の徴候を待たず、

肺炎の診断を得た時点で早期に治療介入を行うことで重症化の阻止、致命率の低下をもたらすことができるかもしれない。

文 献

- 1) 中村 啓二ほか, 「当院における新型コロナウイルス (2019-nCoV) 感染症患者 3 例の報告」
- 2) C M Chu, *et al.* Role of lopinavir / ritonavir in the treatment of SARS: initial virological and clinical findings. Doi: 10.1136/thrax.2003.012658